拓殖大学 Shariah Research Institute
イスラーム研究所
معهد دراسات الشريعة
ニューズレター Vol.13 No.2

寧夏回族自治区銀川出張報告

イスラーム研究所シャリーア専門委員会
委員長 武藤英臣

ハラール食品認証国際協力フォーラム

中国寧夏回族自治区首都・銀川市にベースを置く「China [Ningxia] Halal Food International Trade Certification Center」（略称CHFITCC）は、中国政府が認める唯一の公式ハラール認証団体である。同組織は2005年よりアラブ諸国（UAE）/ 中国（寧夏）と交互に国際ハラール食品展示会を開催してきた。

今年は、中国（CHFITCC）側が9月10日～13日、「中国・アラブ諸国ハラール食品展示会」期間中に「ハラール食品認証国際協力フォーラム」を開催した。同フォーラム開催趣旨はCHFITCCが世界各国認証団体との協力をもって認証相互承認と統一基準制定し、かつ貿易のフラットフォームを形成し、相互利益・相互繁栄に寄与する“新シルクロード”「一帯一路」の一翼を担うことである。

イスラーム研究所から森伸生所長と私がCHFITCCの正式な招待を受けて同フォーラムに参加した。

フォーラム参加者集合写真

同フォーラムには世界各国17カ国43人、中国国内から100人近くの参加者がいた。フォーラムは寧夏回族自治区・銀川市の高級ホテル・ホリディ・インの国際会議場で行われ、フォーラム参加の各国ハラール認証団体関係者や研究者がそれぞれの認証方法や状況などを発表した。

発表内容は以下の通りである。

○9月11日金曜日午後

（1）第一セッション・テーマ 「ハラール認証の国際的協力」（午後3時～5時）

「ハラールのオペックについて」“European Supreme Halal Council”

「ハラールの全世界的な協力」“Halal Certification Authority”

「国際ハラール貿易とハラール基準の調和を促進するための手段」“Halal Foundation (Pakistan)”

「グローバルハラール産業の可能性と機会 － 概要」“Gulf Halal Center”

「新シルクロード・パキスタン・中国経済回廊＆ハラール産業との連携」“Punjab Halal Development Agency (Pakistan)”

「我々はムスリムの実際の消費者の需要に一致するハラール認証システムをいかに構築すべきなのか？」“Tokyo Institute of Technology”

「ハラール食品業界のグローバルな問題や課題」“Business College of the University Utara Malaysia”

（2）第二セッション・テーマ 「ハラール認証の基準」（5時～7時）

「OIC（イスラーム諸国協力機構）とSMIICの紹介」“The Standards and Metrology Institute for Islamic Countries (SMIIC)”

「ハラール・エコシステムの重要性」“Halal Development Dev. Corp（HDC）, Malaysia”

「イスラーム・ハラールのガイドライン」“Halal Awareness & Research Council”

「ハラール屠畜技術」“Australia Halal Food Services”

○9月12日土曜日午前9時～12時

（3）第三セッション「各国のハラール認証」

「ニュージーランド食品のハラール認証」“Federation of the Islamic Associations of New Zealand（FIANZ）”

「持続可能なハラール産業の開発：フィリピンの経験と取り組み」“Department of Science and Technology（DOST）XII, PHillipine”

「ハラール認証の重要性」“Japan Muslim Association, Shariah Research Institute of Takushoku Univ.”

「ハラール食品の認証とインドネシアの展望において地域の協力的な組織化の機会」“Economic Research Center, Indonesian Institute of Sciences”

「ハラール食品とその認定 － オーストリアから世界へ」“Islamic Council Austria”

「寧夏回族自治区国際ハラール食品の認証と貿易センターの紹介」

"Ningxia Halal Food Certification Standard – making Committee"

各国の認証団体はそれぞれのハラール認証方式などを詳細に説明することによって、自分たちのハラール認証がいかにイスラーム法に則しているかを強調していた。当イスラーム研究所からは森所長が第三セッションで「ハラールの重要性」について発表した。

発表する森イスラーム研究所長

同フォーラム開催趣旨の一つに国際的なハラール基準制定を目指すことがあったが、それを導きだすには程遠いと言わざるを得ない。イスラーム法学派の見解の相違があるゆえに、一つの基準を出すことは難しいことは理解される。それはイスラーム法解釈に幅があるという理解にもなるが、一方では統一の取れないもどかしさにもなる。各国のハラール証明書発行に従事しているイスラーム団体の発表にしても、それぞれの発行の手順などを説明するだけにとどまり、イスラーム法的な基準の是非にまでつっこんだ発表をすることはなかった。やはり、基準を定めるにはイスラーム法学者による徹底した論議の末に決定する必要がある。しかし、それぞれにイスラーム法の理解によってハラール認証を出していることが確認できたことによって、相互にそれぞれを認め合う方向ができたといえる。それは、主催側にとってもある程度の成果となったことであろう。

フォーラム会場風景

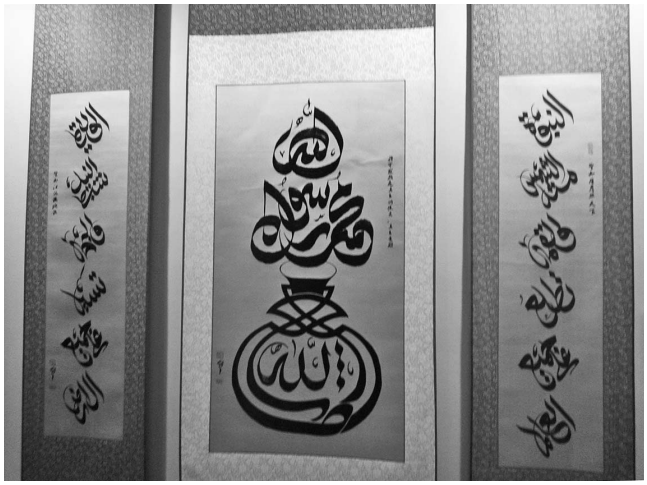
中国・アラブ展示会場視察

9月12日（土）午後2時半から、中国・アラブ展示会場を参加者全員で視察した。

展示会場風景

「展示会場」には大型バスで向かったが渋滞で3時半頃に到着した。会場には一般見学者が多数、来場しており、会場入口で待つことになったが、「フォーラム」参加者ということで脇の入口からVIP入場扱いを受けた。

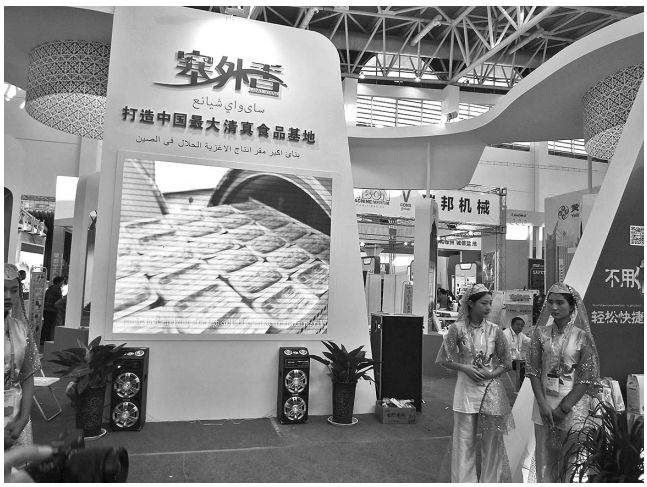
会場内は1階、2階にブースが一面に作られており、ブースで紹介されている商品には衣類、化粧品、宝石、家具、雑貨、日用品、工芸品や、工学関係ロボットなどもあり、種々雑多であった。毛筆によるアラビア文字書道もあり、その素晴らしさに見とれた。一部を写真で紹介する。



毛筆によるアラビア語書道

出店していた国は中国、香港、シンガポールなどが多く、アラブからは残念なことにヨルダンからだけであった。ヨルダン人一人が商品の説明をしており、色砂の商品を作成し説明していた。少々、さびしい気もした。食品については、あまり多くを見つけることができなかったが、それでも、製品には清真食品（イスラーム食品）と記しているのが認められた。また、別な表現で「マトアム・アルイスラーミ」（イスラーム・レストラン）とか「アルイスラーミー」（イスラーム的）などとアラビア語で記してあった。珍しいものでは「ウサギ」肉が売られていたが、それには清真もハラールの文字もなかった。彼らにとってはハラールは当然なのかもしれない。

「中国・アラブ展示会場」の趣旨にそって、全体的にアラビア語が各所に見られるが、とくにハラール関係食品はアラビア語でそれをアピールしていた。回族の女性たちは売り子や案内で活躍してお



会場の回族女性

回族物産展示即売会場のイスラーム服店

り、その姿は伝統的な回族のスカーフをかぶっており、かわいい雰囲気を出して、来訪者に喜ばれていた。食品については、「展示会場」に併設されている「回族物産展示即売会場」でもっと多くのものを見ることができた。

回族物産展示即売会会場入口

ハラールマークのついた食品

翌日、午後3時に、その「回族物産展示即売会場」を1時間ほど視察した。同即売場は「展示会場」よりも活気があり、来訪者もさらに多かった。餃子などが料理されており、いい匂いで客を誘っていた。アラブ服や女性のアバーヤ(全身を覆うアラブの伝統的衣装)なども売っていた。店の名前は「アルブハーリー　フィー　アッスィーン」という。その意味は「中国でのブハラ出身者」ということである。鹿の肉も売っていた。ハラール・マークが付いていた。鹿の胎盤までがペースト状の瓶詰で売っていた。やはり、ハラール・マーク付きである。そのペーストの助剤などは何なのかと気なったが。漬物などのようなものまでハラール・マークが付いていた。しかし、豆や乾物などにはついていなかった。銀川のムスリムの生活を垣間見た思いがした。

清真の表示をして販売される牛肉

寧夏回族自治区のイスラーム社会に思う

イスラーム研究所所長
教授　森　伸生

寧夏回族自治区の総人口は625万2千人（2009年）で、民族別人口の内訳は、漢族395万2千人（63.2%）、回族225万1千人（36%）、その他の民族4万8千人（0.8%）で、回族自治区であるにもわらず回族は少数派である。さらに、銀川市においてはその傾向が一層強く、総人口105万8千人のうち、回族は23万4千人（22.2%）にすぎないといわれている。（中国ムスリム研究会「中国のムスリムを知るための60章」明石書店2012年33頁）

今回の出張で9月9日に関空から上海を経て銀川へと向かった。その間に、日本で学ぶ銀川出身の若者に入国手続きなどで手伝ってもらい非常に助かった。彼は回族であるという。そこでムスリムかと思いきや、彼はムスリムではないという。それが回族の現実なのかと少々考えさせられた。たぶんに、彼の2世代、3世代前まではムスリムと言っていたであろうが、現在ではムスリムとしての信仰を表明しなくなったのであろう。しかし、それも今後、時代の流れとともに、イスラーム覚醒が起こるきっかけがないとも限らないのである。

銀川に到着して、翌日には一日の余裕があり、さっそく、銀川のモスクに行くことにした。案内は主催者側が準備してくれたボランティアの学生である。寧夏大学の学生チェン君であり、回族のムスリムであるという。チェン君の案内で、午前11時に銀川南関清真大寺（モスク）に向かった。同モスクは大通りに面した一角を占めていた。その姿は白い壁と緑のドームを持つ、中東のイスラーム建築様式の特徴を持っていた。中国風のモスクをイメージしていたので、少々当てが外れた思いもあるが、その歴史を知ると納得できた。同モスクは17世紀の明代末から清代初めにかけて建設されて、その時は中国伝統の古典建築様式であったという。1966年の文化大革命によって破壊されて、1985年から再建されて現在の中東のイスラーム建築様式となった。現在もモスクを取り巻く外壁は修復中である。モスクの入り口には門番の女性がいて、入場料の窓口があったが、アッサラーム・アライクムと挨拶をしていくと、そのまま通してもらった。

南関清真寺正面

南関清真寺中庭

南関清真寺内部

中央の中庭を通り、正面の石段を上がると、モスクの礼拝堂になっていて、内部にはムスリムしか入れないとなっている。私たちは礼拝堂に入り、挨拶の礼拝を行った。礼拝堂は縦横ともに約20メートルほどである。正面に礼拝方向を示すミフラーブがあり、そのそばに説教台があって、2メートルほどの長さの木の杖が立てかけてあった。これは金曜礼拝の説教の際に杖を手にしていたという預言者の慣行が実践されているのである。そして、右端の角には、バイト・アルイウティカーフと書かれた小部屋が設置されている。それは「お籠りの家（部屋）」という意味である。これは中東では見たことのない設置であった。断食月ラマダーンのときに、この部屋に籠って、クルアーンを読誦したり、任意の礼拝をしたり、祈りの文句を唱え続けたりするのであろう。この「お籠りの部屋」は他のモスクでも見ることができた。中国のモスクにはどこでもこれが設置されているということであろうか。他の地域のモスク訪問者に尋ねてみることにする。礼拝堂を見渡してみると、礼拝するときに着るであろう長衣が何着も壁に掛けてあるのが目に入った。生活感があるモスクであると感じて嬉しくなった。なかなか日本では感じることができない感覚である。礼拝堂の前には礼拝時間がしっかりと掲げてある。一般の人が来て、確認して礼拝するのだろう。外に出て石段を下りると、中庭の両脇には、部屋が作られている。それは学習教室となっている。一部は管理人の部屋でもある。礼拝堂の

下階には女性用の礼拝場、洗浄場などがあるとのことであるが、今回は確認をすることができなかった。管理人がいたので、モスクの発展を祈って、その場を去った。大通りを挟んで同モスクの向かいにはハラール肉の店があり、礼拝に来た者がこの店に寄って買物をし、家路に急ぐのであろう。この肉は配送も行っているとのことである。

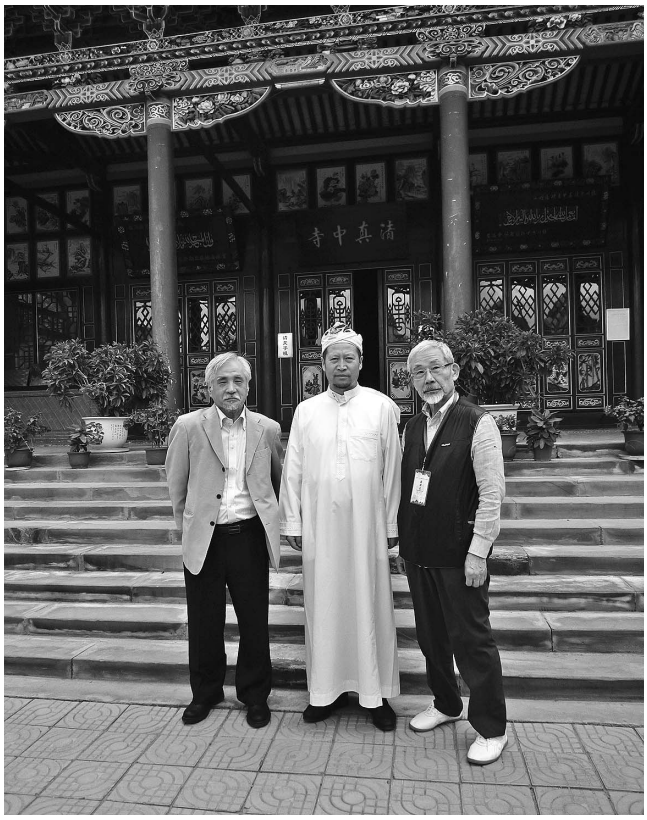
説教台と杖

南関清真寺内部にあるお籠りの部屋

9月11日（金）に宿泊しているホテル・ホリディ・インの近くにあるモスクに、フォーラム参加者とともに金曜礼拝に行った。清真中寺（モスク）という中国風のモスクである。礼拝堂への中庭は工事中であった。礼拝堂に入ると、中ではすでに200人くらいが座っていた。クルアーンが流れるなか、全員が正座して座っている。クルアーン朗誦に敬意を示しているのである。中東ではあまり見かけない光景である。一列目には白い長衣を着た若者たちが座っていた。イマームの弟子たちでないかと思う。私は後方の列で任意の礼拝を行った。他の人たちの礼拝を見ていると、任意の礼拝を4ラクア（単位）行っていたので、ハナフィー学派なのだと再確認した。

清真中寺

私が任意の礼拝を終えると、そばの老人がしきりに前の方へ行くように勧める。客人をもてなそうとの気持が表れていて、それに従う。1時になってから、イマームがミフラーブの前にある説教台の前に立ち、中国語で説教を30分ほど行った。変わった金曜日の説教だなと思っていると、そうではなかった。これはあくまでも金曜日の説教の前に行う講和であったのである。この講和が終わった後に、アザーンが行われた。ここでも全員が姿勢を正して正座する。そして、イマームはミフラーブの横にある、ミンバル（説教台）に三段まで上り、2メートルほどの杖をつき、金曜日の礼拝のための説教を始めた。アラビア語で3分行い、座り、次いで立ち上がり二つ目の説教を2分行った。ここでも預言者の慣行である二つの説教をきっちりと実践している。礼拝後に、イマームと話す機会があった。彼は北京でイスラーム学を修め、半年間、エジプトのアズハル大学で勉強したとのことである。



清真中寺のイマーム（中央）と

その後に、モスクの周辺を見て回った。清めの場所は広々として気持ちいい。これは他のモスクでも同様である。金曜礼拝に案内してくれた大学生のチェン君と彼の仲間は礼拝には参加しなかった。それでも、自分たちはムスリムだとはっきりと言う。これが銀川市の若者ムスリムの一つの姿でもある。一方でイマームのすぐ後ろでクルアーン読誦に専念する若者もいる。すべてを包み込んでいる銀川のイスラーム社会である。

9月13日午前中に、市内から南へ約30キロほどの場所にある中華回郷文化園を訪問した。入場料は60元である。タージマハルを模した白いメインゲートをくぐると広大な敷地が目に入るが、その右手の方に迷路のような花壇でできた道があり、道なりに進むと仮設回族博物館があり、回族の歴史、習慣などが写真パネルで解説されている。大宮殿は現在改装中である。別棟の回族商業貿易通りも建設途中である。そこで、その通りを通りぬけ、納家戸清真寺（モ

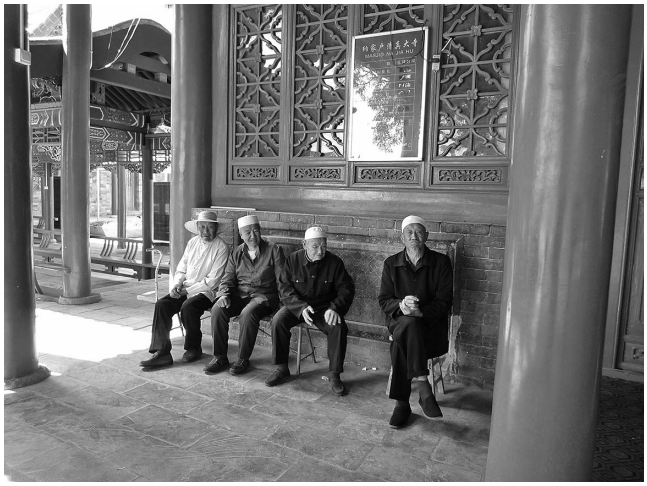
中華回郷文化園

納家戸清真寺の内部

スク）にたどり着いた。同モスクは1524年に建設され、その後、増築、改築が行われ、現在の形となっている。中国建築様式のモスクである。入り口の門楼は両脇に省心楼と呼ばれるミナレットを持ち、高さ21メートルもある堂々たる形で風格がある。同モスクの中には中庭があり、木陰ができており、老人たちがくつろぎ、礼拝の時間を待っていた。隣接する洗浄場で礼拝のため清めを行った。やはり広々とした気持ちの良い清めの場である。礼拝堂で挨拶の礼拝を行った。礼拝堂は面積1102平方メートルもあり、1500人が同時に礼拝できるという。ミフラーブの左右は金色で文字が書かれあり、きらびやかな雰囲気が出ている。内部にはやはり、「お籠りの部屋」があったが、ここでも若者の姿は見られない。

納家戸清真寺の門楼

納家戸清真寺の中庭



納家戸清真寺の中庭でくつろぐ老人たち

9月13日の夜、回族ムスリムの教授の招待で銀川新興住宅地域の庶民的レストランにてムスリムの家庭風料理を御馳走になった。同席したのは同教授の5歳の息子で名前をアフマドという。他に教授の教え子だという男女の学生は、二人とも非ムスリムである。もう一人は甘省のムスリム教育者で、ムスリム名をムハンマド・アリーだと自己紹介をした。しかし、名刺には中国名しか書かれていない。ムスリムと非ムスリムに対する使い分けであろうか。ここでは、ムスリムと非ムスリムの交流は生活の一部として自然な形で行なわれていて、双方がそれぞれの立場を理解してのことであろう。政府の政策として回族はあくまでも民族であり、宗教を表にすることはないであろうが、そのような社会状況の中で、回族のムスリムがいかにイスラームの信仰を保持していくかは、大きな課題として受け継がれていくことになるのであろう。

イスラーム法学者ワハバ・ムスタファー・アッズヘイリー博士訃報

2015年8月8日、イスラーム世界では知らない人がいないというイスラーム法学者のワハバ・アッズヘイリー師が亡くなった。博士にアッラーの慈悲がありますように。

博士と当研究所の関係は、平成21年10月10日当研究所主催によるイスラーム講演会で講師をお願いしたことによる。その時には、当時日本で騒がれていたイスラーム金融について「日本におけるイスラーム銀行設立の可能性」と題してイスラーム金融とは何かから始まり日本でもイスラーム銀行を作ることができるかについて博士の考えを述べていただいた。博士は、当時、世界各国のイスラーム銀行のシャリーア委員会のメンバーとして世界各地を飛び回っておられて、この講演をお願いするのに3年間かかったほどだった。このようにイスラーム世界では最も有名な法学者の一人として活躍されていた。また現在，当研究所では博士の代表的著書であるクルアーンの注釈書を使って、クルアーン解釈の公開研究会を年7回開いており、これからも博士との関係は書物を通じて続いていくことになる。

シリアで生まれ、近年混乱を極めるシリアにあっても最後まで祖国を離れることのなかった博士の目には、シリアの現状がどのように映っていたのかを想像すると、忸怩たるものがある。博士は、最後までどの勢力にも肩入れすることなく政治の世界からは中立の立場を貫かれたと伝えられている。ここで博士の偉業を称え、簡単な経歴と業績の一部をお伝えし博士のご冥福を祈りたい。

講演会で講義する故ワハバ博士

1．経歴

ワハバ・ムスタファー・アッズヘイリー博士は、シリアのダマスカス近郊の町ディール・アティーヤで1932年に生まれた。ダマスカスのシャリーア学部で学んだ後、1956年エジプトのアズハル大学のシャリーア学部を主席で卒業。同時に同大学アラビア語学部からアラビア語教師の免状を受けている。1963年にはカイロ大学大学院法学科で「イスラーム法学における戦争の影響について、イスラーム8法学派と国際法の比較」で博士号を取得。

1963年からダマスカス大学のイスラーム法学部で教鞭をとる。1975年に同大教授になりイスラーム法学部イスラーム法学科長になる。その後、カタール、サウジアラビア、首長国連邦、リビヤ、クウエート、スーダンなどの大学で教鞭をとる。

2．業績

現代社会でのシャリーアの分野における博士の貢献は偉大なものがある。教育や研究ばかりでなく、現代的な問題についてのイスラーム法上の回答を行うイジュティハードに努める傍ら、各国でイスラーム法における提言を行うイスラーム学者を集めた法学アカデミーの会員を務めてきた。それはさまざまな国や地域に亘る。例えば、サウジアラビアのマッカやジェッダにある法学アカデミーであったり、ヨルダンの王立イスラーム文明研究所のメンバーなどを務めた。その他にもアメリカやインドなどでもイスラーム法学機関のメンバーに加わっている。またシリアでは、最高法勧告評議会メンバーでもあった。このようにイスラーム法の専門家として博士の知識が求められ、尊敬されていたことは疑いない。また時代は、経済界からも博士に対し、イスラーム銀行の設立にむけてのシャリーア・ボードのメンバーとしての要請は引き手数多な状態だった。イスラーム法学における学識と実践を併せ持つ博士の立場は、現代という時代の要請にちょうどマッチしたものであった。しかし、それは学問における中立を貫くものであり政治的にはどちらか一方に肩入れするものではなかった。

3．受賞

2008年マレーシア政府からマレーシア国民栄誉賞を受賞した。また2014年には世界で影響を与えた500人の中に選ばれている。

4．著書：50冊以上

以下主なものを挙げる。

- 「シャリーアに於ける必要性の理論」『نظرية الضرورة الشرعية』「Nazarieyatu Addaruurati Asshar' eiyati」
- 「保障の理論『نظرية الضمان』「Natharieyatu Addamaan」
- 「イスラーム律法とその根拠」『الفقه الإسلامي و أدلته』(Al-Fiqh Al- 'Islami wa 'Adillatuh)（9巻）（初版1984年）（英訳、マレー語訳、インドネシア語訳、 ダール・ル・フィクル：ダマスカス・シリア）
- 「明解クルアーン注釈」『التفسير المنير』「Attafsir Al-Munir」（16巻）（初版1991年　ダール・ル・フィクル：ダマスカス・シリア）
- 「イスラーム法原理」『أصول الفقه الإسلامي』「Usuul Al-Fiqf Al-Islaami」（2巻）ダール・ル・フィクル：ダマスカス・シリア
- 「信仰信条に於けるイスラーム制度」『نظام الإسلام في العقيدة』(Nithaam Al-Islami Fi Al- 'Aquiedah)
- 「政治体制と国際関係」『نظام الحكم و العلاقات الدولية』(Nithaam Al-Hokmi wa Al- 'Elaaqaati Addawlyiyah)
- 「イスラーム世界の諸問題」『مشكلات العالم الإسلامي』「Mushkilaatu Al- 'Aaalami Al-Islaamiy」
- 「現代イスラーム法判断」『فتاوى معاصرة』「Fataawa Mu' asirah」（初版2003年　ダール・ル・フィクル：ダマスカス・シリア）
- 「イスラーム律法と現代思潮の諸懸案」『قضايا الفقه و الفكر المعاصر』「Qadaayaa Al-Fiqhi wa Al-Fikru Al-Mu' asiri」（初版2006年　ダール・ル・フィクル：ダマスカス・シリア）
- 「現代金融取引」『المعاملات المالية المعاصرة』「Al-M' uamalaat Al-Maaliyah Al-Mu' asirah」（初版2002年 ダール・ル・フィクル：ダマスカス・シリア）

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585　東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419　FAX：03-3947-9416
ホームページURL. http://www.sri.takushoku-u.ac.jp

平成27年10月21日発行　第48号
発行人　拓殖大学イスラーム研究所
編集人　イスラーム研究所客員教授
柏原　良英

拓殖大学　イスラーム研究所 ニューズレター

正統四代カリフの時代－アブーバクル（25）

（前号より）

ウマルの時代にイラクのクーファとバスラの人々がウマルのもとに使節としてやってきた。マディーナに留まり、人々は色々な事を話していた。話はアブーバクルとウマルのことになり、ある者はアブーバクルをウマルよりもより良いとし、またある者はウマルをアブーバクルよりもより良いとした。アルジャールード・ブン・ムアッラーはアブーバクルをウマルよりもより良いとする者の一人であった。

そこへウマルが現われた。手には鞭が一振り握られていた。彼は真っすぐアブーバクルよりも彼をより良いとする者達の方へ行き、彼らをその鞭で打ち付けた。誰かが身を投げ出してその鞭を止めるまで、彼らを打ち続けた。

アルジャールードはウマルを止めにはいり次のように言った。

「冷静に、冷静に、信者達の長よ。アッラーは、アブーバクル殿よりもあなた様が優っていると見ている彼らを決して認めることはありません。アブーバクル殿がいかなることにおいてもあなた様よりも優っていることは周知の事実です。」

やっと、彼らはウマルから解放され、その場を去った。

・・・

またある時、ウマルは夕暮に、説教台に上り、アッラーを讃え、祝福し、それから次ように言った。

「アッラーの使徒様亡き後、この共同体で最も優れた人物はアブーバクルである。以後、この言葉と違うことを言う者がいたならば、それは虚偽者であり、その者には虚偽者としての罰が科せられる。確と納得せよ。」

同じようなことをアリーも言っている。

「誰一人として私をアブーバクルとウマルよりも優れているなどと言うことはならない。もし、そのような者を見付けたならば、その者を虚偽罪で鞭打ちの刑に処する。」　・・・

預言者のいとこのアッバースの息子アブドッラーがウマイヤ朝の創始者ムアーウィヤのもとを訪れた時、ムアーウィヤが彼に「アブーバクルはどのような人物であったか」と尋ねた。アブドッラーは預言者が亡くなった時、まだ13歳もしく15歳であった。後、正統四代カリフ時代を生きぬいて聖遷後68年に他界した。彼は激動のイスラーム世界の拡大時代を目のあたりにしてきた博識さで特に有名であった。

アッバースの息子がアブーバクルについて述べたことには、

「アッラーがアブーバクル殿に慈悲をかけたまいますように。彼は－アッラーに誓って－クルアーンに関しては優れた読唱者であり、不正からは遠ざかり、悪徳とは程遠く、悪行を禁じ、借金は忘れることはなく、アッラーを畏れ、夜中には礼拝に立ち、昼間には断食を行ない、人々には公正な態度で接し、彼らに善行を勧めると共に自らも率先して善行を行ない、現状に感謝し、朝な夕なにアッラーを念い、自分にはより厳しく善行を強いていた人物でした。

彼は他の教友達の中でも、敬虔さ、禁欲さ、貞節さ、誠実さ、知性において抜きんでていました。アッラーは彼を中傷した者を終末まで呪い続けるでありましょう。」

このような教友の言葉を知る程に、アッラーの使徒亡き後最も優れた人物はアブーバクルであると、マディーナの人々の意見が一致していたことをより納得させられるだけである。

（次号に続く）

研究会報告

【平成27年度第2回、3回タフスィール公開研究会開催】

今年度第2回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、平成27年7月25日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は四戸潤弥同志社大学教授でクルアーン第14章イブラーヒーム章24～52節を解説した。また第3回目のタフスィール公開研究会が、同年9月26日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は柏原良英イスラーム研究所客員教授でクルアーン第15章アル・ヒジュル章1～77節を解説した。

محتويات العدد

1. التقرير لمشاركة في منتدى التعاون الدولي على شهادة
الأغذية الحلال ، (نينغشيا) الصين 2015
رئيس لجنة الشريعة لمعهد دراسات الشريعة : موتوهيديئومي
2. الذكريات عن المجتمع الإسلامي من منطقة نينغشيا في الصين
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
3. خبر وفاة الدكتور وهبة الزحيلي
أستاذ زائر لمعهد دراسات الشريعة : كاشيهارا يوشيهيدي
4. مقال : الخلفاء الراشدين (25)
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
5. الأخبار المعهد: الدورات الثاني والثالث لدراسات التفسير (سورة إبراهيم, الحجر)